

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	魚住耕司
論文題目	カメルーン農村における住民のキャッサバ改良品種の受容		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、開発プロジェクトで導入されたキャッサバ改良品種を、地域住民がどのように受容しているのか、受容が進んでいないとすればその要因は何なのかを、カメルーンの一農村の事例から明らかにしたものである。</p> <p>序章では、キャッサバや改良品種に関する先行研究、開発プロジェクトと地域住民との関係に関する先行研究を論じ、本論の目的を述べた。また、調査地に長期滞在しながら、食事調査、家計調査、価格調査、味覚調査、畑の測量など複数の調査によって、多角的にデータを収集したことを述べた。</p> <p>第1章では、調査地の概要とその地で実施された開発プロジェクトについて説明した。調査地では、リネージ (親族集団) 間の根深い対立があることや、多くの開発プロジェクトが繰り返し実施されてきたことを指摘した。また、2011～2016年まで日本とカメルーンの研究者により実施された「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理:地球規模課題と地域住民ニーズとの結合 (FOSAS: Forest-Savanna Sustainability)」プロジェクトでは、キャッサバ改良品種の普及とキャッサバのイモの加工が促進されてきたことを述べた。</p> <p>第2章では、住民組織に着目し、キャッサバの加工事業について論じた。調査地には相互扶助・宗教・農業などの住民組織が多数あるが、相互扶助の住民組織では会員のリネージに偏りがあることを述べた。また、開発プロジェクトではキャッサバ加工事業が住民組織を通じて行なわれてきたが、利益の不公正な分配が原因で活動が停滞していることや、個人による加工事業においては多くのリネージの住民が恩恵を受けているものの、買取価格の問題などがあることを論じた。</p> <p>第3章では、キャッサバのイモ・葉とその加工品の消費・販売状況、キャッサバの品種に対する住民の認識と使い分け、改良品種の販売面での課題について論じた。キャッサバの加工品は住民の生活に欠かせないが、消費・販売量は世帯によって差があること、住民がキャッサバの品種によって異なる嗜好をもち、その特徴に応じて消費・加工・販売において使い分けていること、苦くて筋の多い改良品種は好まれず販売が難しいため在来品種と混ぜて売り、結果、村のキャッサバ全体の評判が低下していることなどについて述べた。</p> <p>第4章では、畑でのキャッサバ改良品種の栽培状況について論じ、住民がプロジェクトでその茎を受け取っていながら放棄・除去した理由を分析した。キャッサバの栽培</p>			

では、畑の場所と植え方という2つの問題があり、自宅から畑までの距離、畑で働くことができる女性の有無、品種に対する認識などの要因により、プロジェクトで分配されたキャッサバ改良品種の茎が放棄・除去されたことを述べた。

終章では、プロジェクトが一部住民に独占され加工業が停滞し（2章）、キャッサバ改良品種の特徴を住民がいかしきれておらず（3章）、畑の場所や働き手の問題から改良品種の茎が放棄されている（4章）といった現状を踏まえ、開発プロジェクトの課題について論じた。調査地においては、開発プロジェクト側の地域への理解の欠如と、地域住民側のキャッサバ改良品種への理解の欠如という問題があり、プロジェクト側が期待したようには受容されていなかった。開発側が地域の間関係に配慮し、一部の住民だけが裨益することにならないようプロジェクトを運営する必要性や、住民に改良品種の特徴を良く説明し、それを生かした栽培・加工・販売を住民と一緒に試行錯誤することの重要性を提言した。また、村全体を代表する組織がない場合、個人単位で参加できる仕組みをつくる必要性を指摘し、開発と地域住民との関係のあり方について議論した。